＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
岡本　啓（おかもと ひろし）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】ニコマコス倫理学　上・下
【著者】アリストテレス（高田三郎 訳）
【発行】岩波書店（岩波文庫）

「万学の祖」と尊崇されるアリストテレスの膨大な講義草稿の中にあって、本書は人間の善き生き方としての徳や幸福について考察した世界哲学史上の至宝。私は学生時代に本書を手に取り、その明晰な定義と問題設定、現実的で緻密な分析と先行研究批判、整然とした論述体系を目の当たりにして、「学問の権威」とは如何なるものかを思い知らされた。なお、ニコマコスとは、一説に原典の編纂者と伝えられるアリストテレスの息子の名である。

【書名】カラマーゾフの兄弟
【著者】フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー
【発行】光文社（光文社古典新訳文庫）、新潮社（新潮文庫）ほか

19世紀ロシア文学の最高峰のひとつ。カラマーゾフ家の父親とその息子たち、彼らを取り巻く人々との間で、凄まじい心理闘争が繰り広げられる。物語の中盤で父親は殺害されるが、その犯人は兄弟のうちの誰か、という推理・法廷小説としても屈指の傑作である。兄弟のひとり（次男イワン）が糾弾する現世の不条理の数々、そして「虐げられた幼き者の涙をこの世界は償うことができるのか」という叫びに、人類はいまも応えることができない。

【書名】あなたのなかのサル――霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源
【著者】フランス・ドゥ・ヴァール（藤井留美 訳）
【発行】早川書房

人間の本性は、そもそも善なのか悪なのか。ヒトは他者への慈愛や共感を示す一方で、酷薄残虐な暴力や殺戮をも嗜好する。本書は、そのような人間性の起源を、チンパンジーとボノボという対照的な霊長類の群れの観察結果から探る。人間の道徳性に関する議論は、長らく形而上の思弁あるいは宗教的な教義の範疇に止まってきたが、現在では進化生物学と行動生態学に立脚した客観的事実に基づいて探究される時代に至ったことを確信できる。

【書名】完全解読　フッサール『現象学の理念』
【著者】竹田青嗣
【発行】講談社（講談社選書メチエ）
本書は、フッサールが創始した現象学のエッセンスを丁寧な訳註によって伝えた労作。自然科学の成果に見られる如く、なぜ人間の内面意識に現われ出る主観は、現実世界に存在する数々の事実（客観）と一致するのであろうか。現象学は、我々の内在意識から現実世界が「構成」されるという立場を徹底することによって、この「主客一致の謎」に挑む認識批判の学である。本書を読むと、私には唯識や西田哲学に通じる問題意識へと深く突き当たる。

【書名】科学哲学入門――科学の方法・科学の目的
【著者】内井惣七
【発行】世界思想社
科学とは何かという問いに対して、２つの立場からの答えがある。一方は、科学は現象の奥に存在する真の法則を明らかにするという実在論。他方は、科学は観察可能な現象を、経験的・確率統計的に妥当性をもつよう組織化するという反実在論である。著者は双方の立場を検討しつつ、科学の営み（その目的、方法、理論など）の全体像を浮き彫りにする。なお、本書は著者の大学での講義を基にしている。本学の学生諸君も「受講」してみては如何。

【書名】科学の危機
【著者】金森修
【発行】集英社（集英社新書）
科学や科学者という言葉から想起される普遍性・無私性・公有性・懐疑主義といったイメージはとうに過去のものであり、現代では科学の局所（専門）化・被委託（請負）化・所有（特許）化・権威主義が進行し、それらがもたらす社会の危機を本書は警告する。「科学が科学者の全人格的完成に直結しないのは、そもそも全人格と呼べるような関わり方を、科学の方がなんら必要としないからだ」という著者の断言は、痛烈な科学者批判である。

【書名】医学と仮説――原因と結果の科学を考える
【著者】津田敏秀
【発行】岩波書店（岩波科学ライブラリー）

著者は医学的因果関係を研究する疫学者であり、「原因」と「結果」は実在世界に属するが、それらを結びつける「因果関係」は言語世界に属する、という大前提を強調する。すなわち、因果関係は確率統計という数学的言語で記述されるのである。森永ヒ素ミルク事件や水俣病において、食中毒としての因果推測にもとづく通常の初動対応が取られていれば、これほどまでの被害の拡大と訴訟の長期化に至ることはなかった、との指摘は重大である。

【書名】中坊公平・私の事件簿
【著者】中坊公平
【発行】集英社（集英社新書）

弁護士であった著者が手がけた14の事件からなる回想録。その中で、著者自身が人生の転機と振り返った「森永ヒ素ミルク中毒事件」民事訴訟は、日本の公害史および裁判史において、被害者（当然ながら事件当時は全て乳児）の恒久的救済制度の実現という画期的な和解を刻印した。本書は、人間の生存と権利が尊重される社会を築くうえで、法と裁判という制度が果たしうる可能性とその限界とを、事件の教訓として生々しく提示してくれる。

【書名】苦海浄土――わが水俣病
【著者】石牟礼道子
【発行】講談社（講談社文庫）

敗戦後、日本の高度経済成長を牽引した重化学工業発展の陰で、最大の産業公害をもたらした水俣病。不知火海への有機水銀の垂れ流しは、生態系と人間を破壊し、家族・地域社会・郷土文化を崩壊させた。この悲哀に充ちた現場を、本書は声高ではなく、寄り添うような文章で告発した「私的」ルポルタージュである。虐げられた人間が宿す「生」の光を、情理を尽くした美しい日本語で書き留めた「現代の民話」に、私は畏敬の念を禁じえない。